夕焼け通信 1365号　2022.8.29
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）111

木幡智恵美

猛暑、コロナ5波（4）

雨が続いた後、暑さは収まっていたが、残暑がやってきた。一旦涼しい日々を過ごしてから厳しい暑さに戻されると、余計に暑さが身に堪える。

暑さが戻った翌日、息子から、あの千葉真一が亡くなったと聞き、びっくり。元気の塊のような方を死に至らしめるコロナウイルスの恐ろしさよ。県内のコロナ感染者も、ずっと二けたが続いている。松江で起きたクラスターは家族同士の会食からだと聞いた。

二度目のコロナワクチン接種があと一週間後に迫った日、左耳の下に違和感があり、押すと痛む。炎症を起こしていたらワクチン接種ができない。他に症状はないけれど、念のため耳鼻科を受診する。「特に異常はないですね。肩こりではないですか」と言われた。

接種日まではと、体調には気を遣いながら過ごしつつ点訳の勉強会に出る。「デルタ株はすれ違っただけでも移るんだって」という会話が耳に入り、ぞっとする。帰りに買い物に寄った際は、なるべく人の居ないところを歩き、何とか買いたいものを籠に詰めていった。

そうして迎えたワクチン接種日。夫は前日に接種をしていて何ともない様子。私も一回目が大丈夫だったから、今回も何事もないとは思ったが、毎晩する運動は控えた。シャワーをして、一杯焼酎をひっかけ、いつも通り眠りについた。

翌朝目が覚めると、何だ?このだるさは。何とか身体を起こすと頭も痛む。ゆっくり台所に降り、食事準備をして食べる。食欲はある。そのうち、関節が痛み出し、熱を測ると三十七度五分。午前中ほとんど横になって過ごす。夫も息子もいないので、残り物で昼食を摂り、また横になる。午後になると熱は三十九度近くまで上がり、もう一ミリも動きたくない。トイレに立ったついでに少しずつ夕食準備する以外は、ただただ横たわっていた。

帰って来た息子が私の様子を見て、「俺、絶対ワクチン打たん」と言い出す。つい最近、広島の三十歳の男性がワクチン接種後亡くなったこともあってだろう。

夕食後、シャワーを浴び、早々に床に就いた。夜中、汗で体中がべたべた。その不快感もあってか、頻繁に目が覚め、少し眠りにつくと夢を見た。義母の夢を何通りか見た。朝、シャワーを浴びて、体中にまとわりついたべたべたを流す。何という爽快感。あれっ。だるさも関節痛も収まっている。丸一日私を苦しめた副反応は、すっかり抜けていたのだ。

がらがら橋日記

宮森健次

黒猫

草取りや水遣りに通っているTさん宅の庭には猫が五六匹か、それよりもっといる。餌をやっているだけで飼ってはいない、というのがTさんの言い分だが、縁の下と庭を住処としており、飼っているのとどこがちがうのかよくわからない。母猫とその子どもたちのように見えるが、実数も実態も不明だ。母猫は全身が薄茶色の縞模様だが、子どもたちは実に多様で、白、黒、茶に毛の長短それぞれに異なっている。

ぼくが水遣りに回ると、トレーに頭を突っ込んでキャットフードを食べていたり、通り道の真ん中で母親が横になって四匹いっぺんに授乳していたりする。ぼくの姿を認めると、慌てて縁の下に逃げ込むので何だか悪いことをした気持ちになる。

「どんどん増えていきますしね、ご近所の目もあるので、止めようと思っているんですが。」

Tさんは何度かぼくにそう言ったが、餌トレーが空になっていたことはなく、猫が残したフードをスズメバチが漁っていたりする。

猫の性格や性質が個体でどれほど違うものかわからないが、子猫のうちの一匹が、際だって異なっていた。他の猫はぼくを見るとビクッとして重心を下げ、警戒心をあらわにするのだが、全身黒のそいつは、全く警戒しないどころか、通ううちにぼくに付いて歩くようになった。水遣りをしているとクネクネと動くホースに飛びかかったり、猫パンチを浴びせたりする。草取りをしていると、揺れる草の先が遊び相手になる。取った草を入れようと手箕を引き寄せると中で横になっている。ぼくの持ち物やすることが珍しくてしかたないらしい。たまに見かけないときは、

「あれっ、今日はアシスタントがいませんね。」

と言うと、Tさん夫妻もどの猫のことか分かっていていっしょに目で探してくれたりするのだった。

Tさんが庭に日よけのテントを立てるというので、二人で作業したときは、シートを張ったりペグを打ったりするそばで興味深そうに見ていたが、仕上げに取りかかるとすぐそばのぼくの背丈ほどの切り株にするすると上り、上から出来映えを観察していた。

「監督、いかがでしょうか。」

と黒に声をかけたら、Tさんが声を上げて笑った。

これほどに恐れを知らず、賢く、好奇心が肉体を得たかのような猫をぼくは知らない。大変な逸材に違いなく、ぼくは無事に成長するのを願ったのだが、どの猫よりも先に姿を消してしまった。目やにをためてどことなく元気がないように見えたのが最後だった。その日もウクライナで幼い子どもの犠牲が報じられたが、なぜかそれがいつもよりひどくこたえた。

30代フリーター　やあ、ジイさん。安倍晋三ほど評価が分かれた首相は珍しい。「国葬」問題であらためて感じた。

年金生活者　私が最後まで安倍晋三に好感を持てなかったのは、自分に似たところがあったからかもしれない。理念にこだわる、批判されると仕返ししたくなる、人の機嫌を取りたがる、といった点だ。

小さな違いは、どの点でも安倍のほうが私よりは徹底していたことであり、大きな違いは彼がそれらの特性を歴代最長の政権につなげることのできる環境の中にいたことだ。

30代　池田信夫が安倍を評して「日本には珍しい『グランドデザイン』をもつ政治家だった」と書いている（「今こそ安倍晋三氏の『反共』の理念が必要だ」、アゴラ、8月15日）。その具体化のひとつがQUAD（日米豪印戦略対話）だと。

年金　「グランドデザイン」は理念を持っていなければ描けない。右派ナショナリストとしてのおのれを鮮明にしていた安倍晋三はその意味でわが国には数少ない理念の政治家だった。QUADは「自由で開かれたインド太平洋」のスローガンのもとに安倍が提唱して実現した。それは中国に対抗する彼の右派的な理念なしには発想されなかっただろう。

彼が理念にこだわる政治家になったのは、祖父・岸信介の影響だ。岸もまた理念の官僚、理念の政治家だった。戦前は北一輝、大川周明に傾倒して国粋主義的な考えを持ち、商工官僚時代にはその理念のもとに計画経済を採り入れた満州の「グランドデザイン」を描いて実行に移した。戦後は対米自立を目指して、自主憲法制定を党是とする自民党の結成に参画し、片務的な日米安保条約の改定を強行した。

対米自立志向は安倍にもみられ、集団的自衛権の行使の一部容認は対等な日米関係へのステップとして位置づけられた。

30代　それは憲法9条の非戦・非武装の理念を棄損した。

年金　それを許したのは、安倍の理念と「グランドデザイン」に対抗し、それを凌駕し得る理念と「グランドデザイン」、すなわち9条にもとづく外交と安全保障の構想を、野党もリベラル派も左派も構築してこなかったからだ。自民党が次々と繰り出す反憲法的、反9条的な政策にただ反対することに終始したからだ。

30代　安倍を「人たらし」と評価する声もある。

年金　彼は相手の機嫌を取っていい気分にさせ、事実上の主導権を握るのを得意とした。それがいちばんきわだったのがトランプに対してだった。アメリカ第一を掲げ、欧州の西側諸国の中で孤立しそうだったトランプの当選が決まると、すかさず訪米して祝意を伝えた。その腰の軽さに新米政治家は気をよくし、何かと助け舟を出してくれそうな安倍に頼る気を起こしたと推察される。

安倍が自分の提唱したQUADを軌道に乗せることができたのも、超大国のトップの信頼（依頼心？）を相当程度まで取りつけていたからと推察することができる。

30代　「外交の安倍」というが、彼のは外交ではなく「社交」だ、といった皮肉を聞くことがあった。

年金　よく言えば、ふだんの「社交」で身に着けた「人たらし」の術を、世界を舞台にした外交に応用したということができる。たぶん日本の歴代首相でそんな芸当をやった人物はいない。

彼の社交術は選挙戦で自陣営の結束をはかるのに大きな貢献をしたに違いない。物おじせずにだれのふところにも飛び込んでいく性格は、たいていの日本人が近づくのに二の足を踏みそうな旧統一教会とも深い関係を築いたことにもあらわれている。祖父以来の縁があったことを差し引いてもそう言えそうだ。

身近な場での社交と広い舞台での外交は別物だというのが常識だろう。その常識から導き出されるのは、国内の選挙に強くても、対外的に成功するとは限らない、という考えだ。ところが、安倍はその常識を臆面もなくひっくり返した。その意味では日本外交のイノベーションを進めたと言える。

30代　国会答弁でよく野党にかみついたのも歴代首相では珍しい。

年金　彼は自分が批判されること自体が我慢ならない。批判自体を認めない。反批判をして論争をしようという気は毛頭ない。だから、批判の中身に応答せず、批判を封じ込めようとする言葉を吐く。

その典型的なのが「私や妻が関係していたということになれば、総理大臣も国会議員もやめる」だ。ほかに「そういうのを印象操作というんですよ」「侮辱するような言辞は止めて頂きたい」というのもあった。論理的に応答する自信のないことを告白しているような言い方と言っていい。

批判者に論争ではなくけんか腰で応じる彼の特性は、選挙戦で力を発揮し、国政選挙6連勝につながった。敵を設定し、それと闘う姿勢を鮮明にすることで、味方の結束を固める。「こんな人たちに負けるわけにはいかない」と。

安倍にくらべれば麻生太郎は論争を嫌がらなかった。参院の財政金融委員会などで共産党の大門実紀史と交わした経済政策をめぐる論戦は「名物」になり、エコノミストも注目したと伝えられる。同じぼんぼんでも、麻生は安倍よりはるかに知的なしたたかさを備えているように見える。

ニュース日記　843

中村　礼治

安倍流政治